サー・ウォルター・スコット

6　クリスティのウィル

トラクエア卿はチャペルホープの丘を駆けあがり
　グレイ・メアズ・テールの滝の脇を下っていった
クリスティのウィルを訪ねるまで
　馬を駆る手を休めなかった

ウィルはというと　塔の銃眼から　5
　こっそり下を盗み見た
「ちぇっ　ついてない
　トラクエア卿が俺に会いに来やがった」

「やぁ　クリスティのウィルよ　恐れるでない
　善人のウィルに危害を加えるつもりはないぞ　10
あのジェドバラの法廷で命を救ってやったではないか
　絞首台から自由の身にしてやったではないか

だが　パンと塩にかけた
　稲妻や風や雨にかけた　誓いを思い出してくれ
私がおまえを必要とするときが来たら　15
　あの恩に報いると誓っただろう」

「もちろんですとも　閣下」とウィルは言った
　「閣下のご恩は忘れてませんぜ
この首を回して掻くときは　いつだって
　トラクエア卿の名とジェドバラの絞首台を思いだしてまさぁ」　20

そう言うとウィルは立派な塔の門を開いて
　トラクエア卿と従者を通した
ハットン・リーで最も肥えた鹿の肩肉を
　食卓に並べた

「はて閣下　なぜしけたツラをしているんですかい　25
　何をお嘆きで

俺が真夜中にハットン・リーで撃った鹿を
　なんで食わないんですかい」

「ああ　宴や狩りはこれっきりかもしれない
　心のなかは苛立ちでいっぱいだ　30
腐敗した裁判所の投票で
　土地も財産もとられ　丸裸にされそうなのだ

だが　老デューリーがあの世へ行ってくれるなら
　そうでなけりゃ　地獄へ落ちてくれてもいい
あるいは　十日だけでも誰かが閉じ込めてくれればなぁ　35
　美しく広い土地はずっと私のものなのに」

ウィルは言った「閣下　今まで何度だって
　ぐうすか寝てた荒くれ者から馬を盗んできましたぜ
閣下のためならもっと大胆な盗みもしまさぁ
　デューリー卿をエディンバラの街からさらってきますぜ　40

ウィルは言った「閣下　今まで何度だって
　すやすや寝てる娘っこの唇を奪ってきましたぜ
閣下のためならどんな危ない橋だってわたりまさぁ
　老いぼれの悪者に法廷から消えてもらいましょうや」

それからクリスティのウィルはエディンバラへ向かい　45
　ボローの荒野を抜けて街に入った
絞首台の石の前を通ったとき
　思わず十字を切って　ひざまずいた

ウィルはデューリー卿の館の前に降り立つと
　勇ましく扉をたたいた　50
デューリー卿は起き上がり　威圧的に口を開いた
　「屈強な若者よ　わしになんの用だ」

ティヴィオットデイルで最も麗しい貴婦人からの
　使者でございます　尊敬する先生様
その方は法廷で所有地をめぐって提訴中　55
　そこで　あなた様に弁護を頼みたいとのこと」

「だがどうやって　その貴婦人のもとへ行くのだ
　わしの体面を損なわずにだぞ」
「スカーフで頬っかむりをして　マントを羽織るのはいかがでしょう
　てまえのマントで包んでさしあげましょう」　60

頭からスカーフをかぶり　マントで顔を隠した裁判官を
　ウィルは立派な馬に押し上げて
その手綱を握り
　軽やかに　その場から駆け去った

ロジアンの辺境を越えぬうちに　65
　二人は大きく響く角笛の音を耳にした
出くわしたのは　なんと
　ミドルトンの荒野で狩りをする　我らが高貴な王さまだった

王だと気づいて　まことに
　ウィルもおじけづいていたよ　70
だが　老デューリーの狼狽ぶりったらそんなもんじゃない
　気づかれたら　面目が丸つぶれだ

王はというと　馬に乗った男女とすれ違ったとき
　こう思って十字を切った
「薄汚いばあさんと図体ばかりの若者とは　75
　なんて胡散臭い組み合わせか」

ウィルはグレアムの塔に急ぎ
　老デューリーを背に担ぎ上げ
深い地下牢に放り込んだ
　デューリーの老骨はボキボキ鳴った　80

十九日と十九夜
　太陽も月も真夜中の星も
老デューリーには一筋の光も見えなかった
　あたりは真っ暗闇だった

薔薇十字の魔術師が　85
　一瞬で網にかけたのだと彼は思った
あるいはジプシーの一団の妖言(およずれ)で

　とうとう頭がおかしくなったのだと

「ヘイ　バティ　おい　あっちへ追え　あっちだ」
　朝になると聞こえてきたのは羊飼いの声だった　90
「ああなんと」老デューリーは嘆いた
　「悪魔がわしに犬をけしかけているのか」

ときには　奇妙で鋭く甲高く
　ネコを呼ぶ声が聞こえた
「今までやってきたことの仕返しか　95
　魔女を何人も樽詰めにしてきた報いなのか」

王は市場に置かれた大きな秤に
　お触書を貼りだした
「デューリー卿を連れ戻した者に
　五百と一マルクを与える」　100

トラクエア卿は密書を書き
　自分の紋章で封印した
「老いぼれ卑劣漢の禁を解け
　万事がうまくいった　土地は護った」

おお　ウィルは美しい黒馬にまたがって　105
　グレアムの塔へと向かい
もう一度　疲れ果てた裁判官を引っ掴んで
　たくましい背に担ぎ上げた

議会の階段まで連れてくると
　ウィルは大声で叫んだ　110
「王さま　ごほうびを
　老デューリー卿です　お引き取りを」

（佐藤貴美子訳）